

10代の母という 生き方 ⑧

大川 聡子

★まえがき

前号（マガジン 17 号）から若年母親へのインタビューを基に、若年母親のもつ社会的不利な状況と、それに対峙するためのピアグループなどの友人を含めたインフォーマルサポートの機能について分析しています。対象者の概要、研究の背景につきましては、マガジン 17 号をご参照ください。本号では、若年母親が出産後に抱える課題について記述していきます。

第3項 母親としての心理社会的課題の表面化

(1) 【若年母親になることによって起きる摩擦】

① 《夫との摩擦》

〈子どもと関わろうとしない夫〉

母親達は若年で子どもを産んだことで「若い母親だから」と言われなかったために、育児に奮闘しています。しかし、父親はそこまで積極的に子どもに関わろうとはしません。そうした父親に対し、「父性がまだ育っていないから」、「男の人だから」と半ばあきらめているような発言がたびたび聞かれました。Iさんは夫への思いを自分の中に溜め、鬱状態になっていたこともあったといいます。

Iさん だから旦那も、子どもと遊んだこともないし、全然子どものこと知らなかったと思う。私も、あまり言うタイプじゃないから、ガーって言わんかってんけど。ふとした時に、1歳くらいになった時に、「何してんねやろ、私」みたいな感じでちょっとなってもうて。もう、鬱やっせん。ずっと。なってるけど、誰も言われへんかって、それを。

〈友人と一緒に遊びたい夫〉

Dさんの夫は、友人達と一緒に女性と遊びたいという思いを持っていました。Dさん自身は、夫に「むちゃくちゃな遊び方はされたくない」という思いはあるのですが、夫のストレスも解消させてあげたいと言う思いもあり、友人達と遊びに行くことを止めた方が良いのか、黙認すべきか迷っていました。

Dさん だから、友達がまだ子どもとか、みんないてなくて、大学生とかそんなんやから。周りの友達とか遊んでるやん？大学の。それがうらやましいみたいで、一緒になって遊ぶから。なんか、しょうもないところでお金使ってきたりとか。なんか、みんな友達とか、女関係とかも激しいし。それに巻き込まれて、そういうしょうもないことされたらイヤやし。で、そういうので心配やから行かしたくないねんけど、でもどうやってストレス発散させてあげよかなって考えても、そんな、友達しかないやんか？だから、どうしたらいいか分からんし。

〈実母の子育てを理想とする夫〉

前号《原家族における母親役割を踏襲する》でも述べたように、原家族における母親に近づこうとするのは母親だけではありません。Cさんの夫も、自らの母親を理想とし、同じような母親になってほしいと妻に要望することで、夫婦間の葛藤が起っていました。

Cさん (夫は)完璧求める人で。だから、自分の母親、マザコンじゃないと思うんだけど、自分の母親が理想像なわけ。家事をしながら3人兄弟おって、家事をしながら子育てをしてというのを見てたから。「それが理想や」って言ってきたから。「へえ」って。だから「私は私やから」って。「最終、なれたらええやろ？」って言って、文句言ったで、めっちゃ。

〈完璧な家事を求める夫〉

Eさんの夫は、夕方6時には仕事を終え家に帰ってくるのですが、その時に家が少しでも散らかっていると機嫌が悪くなるため、1歳9ヵ月の子どもを抱えるEさんは、育児だけでなく家事にも追われていました。

Eさん 初めちょっと頑張りすぎたんかもしれへんけど。気合入れて。なんか初めらへんは仕事5時ぐらいに、5時にいつも終わってんやんか。絶対。ほんで、帰ってきたら6時とかやのに、それまでに風呂ちゃんとためて、部屋も全部ちゃんと片付けて。

Kさん ちょっと早いよな。しんどいな。

Eさん それで、むしろ完璧にできとって、みたいな求めてきたな。ほんで、部屋に3つなんか物が落ちとって、もう汚たって旦那の中ではなんねんやん。「この部屋は汚いんや」ってなって、めっちゃ機嫌悪い。

一方、夫の帰りが遅い F さんは夫の帰宅に合わせて家事をするため、就寝時間は夜の 2～3 時です。仕事をしており子どもを保育園に預けているため、朝も 7 時に起きなければならず、睡眠時間が極端に短くなっていました。F さんや E さんは、子どもだけでなく夫の生活リズムにも合わせなければならず、疲労が溜まりやすい生活を送っています。

②《義父母との摩擦》

〈若年出産は恥ずかしいと考える義母〉

若年母親は、家族からも問題視される場合もあります。問題視する側は義理の父母など、夫の家族である場合が多いです。B さんの場合、髪を茶色に染め、ノースリーブの服を着て、丈の短いスカートを穿くことも、姑からは「母親らしくない」と非難の対象になっていました。しかし、そのことで B さんが自身のスタイルを変えることはありませんでした。B さんは、夫の家族から、若くしての妊娠・出産が恥ずかしいものにとらえられていることを知っており、また、そう言った考えを持つことも当然であるかのように受け止めていました。

司 会 (姑さんは)何でそんなこと(嫁のことをよその子、と)言うんでしょうね？

B さん 恥ずかしいんやわ。「若いし、結婚して子どもなんか産んで、そんなんな、すぐ離婚して親に預けて遊びまわんねん」って、もともとと言われてて。もう結婚するって決まって、親とも話して全部決まって、もう結婚して臨月入った時に「あの時、おろしてくれたら良かったのに」ってもともとと言われてて。(略)結構、だからうるさい。向こうの親は、ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃ。「髪の毛も茶色いし、もうそんなに茶色いし」とか、「ほっといて」みたいな。「そんな短いスカート穿いて」とか。

③《年長の母親との摩擦》

〈合わせなければならない年長の母親〉

子どもが保育所や幼稚園に通うようになった時、親として若年母親達に関わるのは、年上の母親であることが多く、「若い人はいない」といいます。そのため、「付き合うのがちょっとしんどい」という意見もありました。しかし、年上の母親と付き合いの中で、少数派である自分達が「合わせなければならない存在」であると感じ、「しんどい」と感じながらも、臨機応変に対処しようとしています。

D さん 幼稚園とか行くやんか、子どもが仲良くなっても、親の歳が全然違うやんか。それでも、仲良くやっていけるんかな、みたいな。子ども同士は仲良くなっても、親同士が仲悪かって、仲悪いていうか、そんなん歳全然違うやんか？ それってどうなんのやろな、みたいな。

複 数 ああー。

N さん それって、頑張らなあかんとかやな。

I さん うちらが合わせなあかんからな。絶対に。

④《周囲との摩擦》

〈根拠なく子どもを虐待していると思われる〉

母親たちは、若くして出産したことにより、周囲から「どうせ虐待しているんでしょ」、「子どもが子どもを産んでどうする」等、様々な偏見の視線を向けられています。Cさんはこうした中傷に、その場で反論し対処していました。

Cさん 「どうせ虐待してるんでしょ」、これは妊娠中じゃないけど、産まれてから言われた。

司 会 そうするのはだれが言う？

Cさん (子ども)とどっかで買い物してる時に言われた。知らんおばちゃんに。どついてもやろうかな思った。ほんまに。「何であんたに言われなあかんの?」とか思った。「どこをどう見てそういう風に言ってるんですか」って言うたもんな。「背中とか見ますか?」って言ったもんな。「全身見ていいですよ」って。

こうした中傷は後を絶ちません。さらに、周囲の人だけでなく、医療従事者も問題視する側になることもあります。

Bさんは受診の際、産婦人科医に「流産しやすいから気をつけて」と言われました。なぜかとBさんが問い直すと、夜遊びをしていると言ったわけでもないのに「夜遊び」と言われ、憤りを感じたそうです。Bさんはその医師を避けるようになり、そのことを同病院の助産師や看護師に話したところ、皆でその医師の診察を避けるよう配慮してくれたといいます。Bさんの場合は、他職種によりフォローすることができましたが、援助者が対象者を問題視することで、支援を受けにくい状況を作ってしまうことも考えられます。

〈偏見視されることへの抵抗と諦め〉

Cさん こんなん(インタビュー)でさ、なんか10代で子ども産んだ人達に対する偏見な目とかなくなってくれたらええよな。

Bさん なくならへんて。

Cさん 無理やけど。でも、少しさあ、和らいでくれたらええと思うわ。やっぱ偏見な目で見るとか多いやんか。なんであんな人がとかさ。「やっぱり」って言われるのが一番悔しいもんな。(略)一部しか見てないんやと思うけど、一部でそういう風に悪いことがあるから、全てがそうって思われるからな。それが消えない限り。

Bさん 最近なんか慣れてきた。そういう目で見られることに。

Cさんは、このような若年母親に対する偏見を「なくなればいい」と考えていましたが、Bさんは「なくなるしない」ものであるという認識を持っており、偏見にも「慣れてきて」いました。またそういった偏見を持つ人々を、そんな見方しかできないのかと諦めており、反論や対抗することもしなくなっていました。

*プライバシー保護のため、データを一部改変しています。